

現代語・現代文化学系

教員数	教員等数 (人)	教 授 19 (19)	助 教 授 26 (23)	講 師 13 (15)	助 手 - (4)	技 官〔準研〕 1 (-)	
	異動状況 (人)	退職・転出 - (4)	昇 任 1 (-)	採 用 1 (4)	学 内 3 (2)		
研究活動	研究発表 (件)	論文・著書発表数		学 会 発 表 数			
		国 内	国 外	国 内	国 外		
		121 (136)	11 (15)	40 (47)	6 (13)		
	受賞数	0 (0件)					
	研究費等		採 択 件 数	採 択 率 (%)	金 額 (千円)		
		科学研究費	10 (9)	43.4%	11,200 (10,600)		
		学内プロ	12 (10)	41.3%	7,300 (9,100)		
奨学寄附金件数・金額			件	千円 (件	千円)		
受託研究件数・金額			件	千円 (件	千円)		
	受 託 研 究 員	人 (人)					
施設・設備							

・ () は前年度の数値を示す。

1 現代語・現代文化学系の活動

本学系では今年度もかなり活発な研究活動が展開された。研究の形態は個人研究が大半であるが、共同研究についても、学系の4研究分野(外国語学・外国語教育学・外国文学・現代文化学)の枠内外で活発に行われ、すぐれた成果を上げた。さらに、学内の文系研究組織としては初めて外部評価を受け、30年近いこれまでの学系の研究活動について学外の有識者からさまざまな提言を受け、今後の研究を一層活性化するための指針を得ることができた。加えて、学系構成員の研究成果を社会に還元するための方策として第1回公開セミナー「ことばと文化」を実施し、地域貢献の具体的な取組みを開始することができた。

2 自己評価と課題

(1) 自己評価：平成14年度の重点目標は、「世界の言語と文化の研究」を目的に設置された本学系の30年近い研究活動を総括し、今後の研究活動を一層活性化する方策を探るため、学外の有識者による外部評価を受けることにあった。この目的を遂行するために、学系に外部評価実行委員会を設置し、構成員のこれまでの研究と業務に係る活動の記録を整理し、膨大な資料を作成した。これらの資料に基づき、本学系の目標の達成度と研究成果について客観的な判断を求め、外部評価を受けた。本学の文系研究組織が外部評価を受けるのは本学系が最初であったことから、学内外から大きな関心を集めた。一方、教育組織が実施している公開講座に対応するものとして、公開セミナー「ことばと文化」を開催し、研究成果を社会へ還元することを試み、好評であった。

学系構成員の著書・論文の発表数及び学会発表数は、若手の構成員数が減少したこともあり、国内・国外分とも昨年度より若干少ないが、全体として見れば例年並みの研究成果を上げることができたといえるであろう。海外での著書・論文の公刊11件及び海外での学会発表6件のほとんどは助教授以下の構成員によるものであり、若手の構成員が研究成果を積極的に海外に発信しているのは高く評価できる。科学研究費及び学内プロジェクトの採択件数が昨年度を上回ったことは歓迎すべきことであり、博士号取得者が着実に増えていること、任意のグループによる研究活動も盛んであることなどを総合してみると、学系の研究活動は意欲的かつ活発であったと評価できるであろう。

(2) 課題：本年は教授3名、助教授1名が定年退官となることから、これらの空席枠を昇任人事によって補充すべく、審議を重ねたが、2件の助教授昇任人事は実現しえたものの、教授昇任人事は叶えることができなかった。3つの教授空席枠を速やかに補充し、研究体制の強化を図らねばならない。博士課程研究科の担当者数は若干増加したが、さらに多くの構成員が研究者の育成に加わるよう努めねばならない。学系の構成員が多く参画できる新たな特別プロジェクトが発足することとなったことから、これを契機に共同研究を一層推進せねばならない。学系の研究活動は上記のように活発ではあるが、独立行政法人化を1年後に控え、研究遂行の基盤となる資金の確保、とりわけ、科学研究費等の外部資金の導入や学内プロジェクトの採択率を上げるための方策について、具体的な検討と真摯な努力が強く望まれる。さらに、研究成果の多くを海外に向けて発信できるものへと切り替える意識を一層高めねばならない。同時に、大学・学系・研究分野という既存の枠を越えて共同・協力し、優れた成果を上げうる新たな研究体制を構築せねばならない。